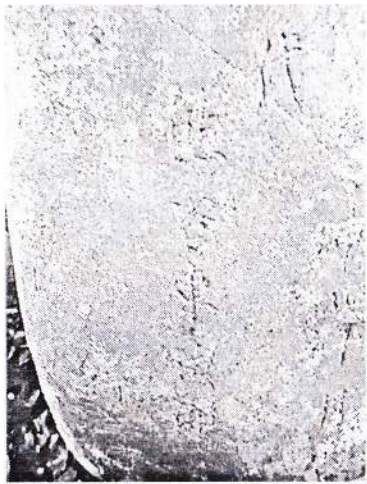


## 「槐（さいかち）の木・面瀬地区秘されし葛西の心」

気仙沼の歴史をひもとく時、よく葛西氏の名が出てくると感じる。いやそれ以上に葛西氏と気仙沼は因縁めいたものを感じるのである。葛西氏とは一体なものなのかを私達気仙沼人自身が知らないといけないと思う。そして当然、現気仙沼、面瀬地区との因縁も知りたい。江戸期の岩月村の千岩田家（千苺田家）については、面瀬の新昔話「三陸黄金伝説」でその出自は述べた。葛西氏家臣の落ち武者千田大学が初代千岩田の熊谷家（千苺田家）の祖先であることは史実としてある。現在の千岩田熊谷家の久保館（屋号）の当主・熊谷信雄氏によると、千田大学が「熊谷」を名乗ったのは、大学が落ちのび来た時に、熊谷直家系の家老であった久保館・熊谷を名乗ることで秀吉から追われている葛西一門であることを隠すためであつと言う。その身を隠

すという風習は昭和の最近まで残っていて、その一つは久保館・熊谷家では正月には門松を立てない。二つは正月三日は「もつかけ」と言って神前にご飯を椀で伏せて供え、四日目にそれを雑炊にして食べていたという。これらは、葛西一門の落人ということを隠すために目立つことをしないという風習が残ったものであろうという。

さて、サイカチの木についての話は小野寺憲雄氏宅を平成二十五年四月に訪れた時にうかがった実に興味深い話である。まず葛西氏は鎌倉時代初期の武家であり長く奥州北上川沿いの領地



▲千岩田にある千田大学と伝えられる墓石▲

において、豊臣政権時代まで紆余曲折はあるものの統治者であった。しかし、秀吉の小田原攻めに後れをとり改易となっている。だが、奥州の一部を長らく統治した葛西氏には血族姻族の子孫数多あり、またその家臣団も膨大であった。これらが当地方でも葛西を知らねば歴史語れずの原因ともなっている。当然ながら江戸初期には葛西の血筋や家臣筋がこの領域には多くいた。中にはその定住村落の名主や肝煎となった者もいた。現在の一関市の一带にはこのような素封家の家屋の門口に槐（さいかち・槐樹えんじゅ）を植えていることが多かった。これは葛西家の家臣としての誇りと再興を願うものであり、「さいかち」とは「葛西が勝ち」とか「（葛西）が再度、勝つ」という意味合いをもつと言い伝えられてきたという。

また、石巻方面には葛西氏に縁のある人達は葛西をおとしめた伊達氏を嫌う家が多いという。旧桃生町などでは庭に槐・皂莢（さいかち）の木を植えた家が多くこれは「葛西勝つ」に語呂を合わせているとのことだ。

この一関一帯、石巻にあるサイカチについての言い伝えは、気仙沼の現在の面瀬、松岩にもあるとの小野寺憲雄氏のお話であった。そして実際にサイ

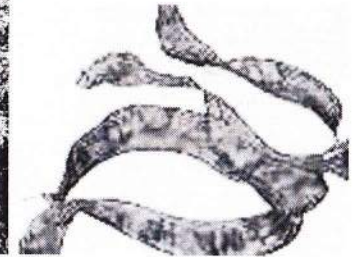
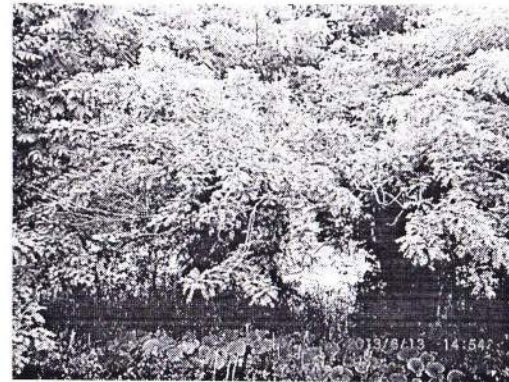
カチの木は昭和四十年代には屋号をもった名門民家の庭などにあったというのである。小野寺氏の記憶によると、

- 一、 お蔵守（屋号、姓；熊谷）の庭
- 二、 母体田の小林（屋号、姓；小松）の庭
- 三、 古郡（屋号、姓；尾形）の庭

織豊政権時の版図を考えると当然気仙沼も史実的には葛西氏の領内であり、葛西氏没落後も家臣団は、一関方面と同じように葛西氏の復興を願っていたのではないかと思われる。そのサイカチの木が歴史ある現面瀬地区にあっても不思議ではない。

さてサイカチの木は、よく大木となり樹齢数百年というような巨木もある。群馬県吾妻郡中之条町の「市城のサイカチ」や、山梨県北杜市（旧長坂町）の「鳥久保のサイカチ」のように県の天然記念物に指定されている木もある。木材は建築、家具、器具、薪炭用として用いる。豆果は皂莢（「さいかち」または「そうきょう」と読む）という生薬で去痰薬、利尿薬として用いられた。またサポニンを多く含むため古くから洗剤として使われている。莢（さ

や)を水につけて手で揉むと、ぬめりと泡が出るので、かつてはこれを石鹼の代わりに利用した。石鹼が簡単に手に入るようになって、石鹼のアルカリで傷む絹の着物の洗濯などに利用されていたようである(煮出して使う)。棘は漢方では皂角刺といい、腫れ物やリウマチに効くとされる。このように有用性があることをみると、人間生活に大きく役立つので家に植栽していたとも考えられる。



▲サイカチの木と葉▲  
面瀬川沿いにて

▲サイカチの種▲